

【研究背景】

2008年の北京オリンピックで、太田雄貴選手は日本人選手として初の銀メダルを獲得し、日本フェンシング界に大きな希望をもたらした。試合後のインタビューでの「メダルを取れたということはフェンシングにとって大きな一歩」というコメントからも、日本のフェンシングはこれからより一層の発展をしていかなければいけない。そのためには、ロンドンオリンピックにおいてのメダル獲得が必要不可欠であり、メダル獲得が成された北京オリンピックからロンドンオリンピックに向けたフェンシング協会の教化政策について研究することにより、今後の日本のフェンシングの競技力向上に寄与できるのではないかと考えた。

【研究目的】

本論文では銀メダルを獲得し大きな一歩を踏み出した北京オリンピックから2012年のロンドンオリンピックに向けた日本フェンシング協会の強化策について日本のフェンシングが取り巻く環境を明らかにするとともに国際大会での戦績の推移との関係性を研究することを目的とする。第1節では国内における競技環境の整備、第2節ではロンドンオリンピックに向けた強化のための政策についての目的を明らかにする。

【研究方法】

本研究では、北京オリンピックに向けた強化策とロンドンオリンピックに向けた強化策の比較を明らかにするために1)ロンドンオリンピックに向けた強化策の具体的な内容、2)環境整備、3)強化策による戦績の3点について考察していく。

【結果】

ロンドンオリンピックに向けて強化費の増加、外国人コーチの充実など、環境面における強化費を投じたことにより、世界と対等に戦い、各種目とも世界ランキングが上がっていることが明らかになったと考えられる。

【考察】

今回の研究では、ロンドンオリンピックで5つのメダル獲得を目指し強化策を打ち出した日本フェンシング協会の強化策について研究した。

5つのメダル獲得を目指す中で、ロンドンオリンピックに向けて600日合宿を実施している。特に環境面において外国人コーチを招聘し、外国を連取拠点とすることなく、国内でよりレベルの高い指導が受けられるように、また居住地をJISS近辺に設けるなど、練習に集中できる環境を整えた。さらには、直近の大会に向けた政策のみならず、中・長期的な視点から、2016年、2020年のオリンピックに向けたビジョンも打ち出している。ジュニア期の選手を対象として年3～4回強化合宿を開催し、ナショナルチームと合同練習をさせることで強化を図っている現状がある。

【結論】

今回、ロンドンオリンピック強化策は日本のフェンシングの歴史にはない大改革が成された。北京オリンピックの際の強化費は6000万円であったが、今回のロンドンオリンピックでは1億8000万円もの強化費を投じることとなる。強化費が増えた背景として、太田選手の銀メダル獲得によって認知度や知名度が高まったことなど、国内の競技レベルの工場からの視点が考えられ、ロンドンオリンピックでのメダル獲得によって、さらに日本のフェンシングを取り巻く環境を良くするのではないだろうか。

日本フェンシング協会が掲げるロンドンオリンピックでの5つメダル獲得が達成されたとすれば今回の強化策は、2016年のリオデジャネイロオリンピック強化策に必ず活きことになると考えられる。

よって来るロンドンオリンピックに向けた強化策は、今後の日本のフェンシングの取り巻く環境や社会的価値の向上や認知度を上げるチャンスであると言える。